

ライネツケの歌曲 および ヴェーバー第3楽章に関連する詩

訳：藤本一子

《森の挨拶》 Graf A.von Schlippenbach

フォン・シュリッペンバハ詩

Durch des Waldes herbstlich tiefes Schweigen
Zieht ein Hauch,
Rührt die Blätter alle an den Zweigen,
Rührt mich auch.

Wie es mahnend rauscht zu meinen Füßen!
Trauter Wald!
Ich versteh' dein feierliches Grüßen:
Bald! ja bald!

Hält mich Waldeszauber lind umfängen
Weicht der Schmerz
Schleicht sich Wehmuth sacht',
Statt Leid und Bangen in das Herz.

Wenn sich rauschend dann die Wipfel neigen,
Trauter Wald, trauter Wald,
Ich versteh' dein Grüßen aus den Zweigen,
Bald, ja bald, bald, ja bald!

秋の森の深い沈黙を貫いて
流れくる 一つのそよぎ
すべての葉を枝々で震わせ
震わせる 私をも

なんと警告するように私の足元でざわめくこと！
親しい森よ！
私にはわかる、おまえの 祝祭的な挨拶の意味が：
すぐ！そう すぐなのだ！

森の魔法に柔らかに包まれると
苦痛は和らぎ
悩みと不安にかわって、哀愁が
心の中へそっと忍びよる

ざわめきつつ、梢が身を屈めるとき
親しい森よ、親しい森よ
私にはわかる、枝々から聞こえるおまえの挨拶の意味が：
すぐ、そう すぐだ、すぐなのだ！

《春の花たち》 Graf A.von Schlippenbach

フォン・シュリッペンバハ詩

Nun glänzen im Lenzen die Blümlein all,
Die Aeuglein, die Zweiglein, der Wasserfall,
Schneeglöckchen, Schneeflöcken
im Sonnenschein,
Blau Veilchen, ein Weilchen hüll dich ein.

Tulpanen, ihr Fahnen des Frühlings schnell,
Schwertlilien, Jonquillen sind alle zur Stell'.
Narzissen die wissen wie mir geschehen,
Massliebchen, mein Liebchen
ist Tausendschön.

もう春のなかで輝いている、小さな花が みんなして
ちっちゃなお目目、小さい枝、水のしたたり
待雪草、お陽さまに光る雪のひら
青スマレさん、君はあと少しで満開だ

チューリップ、君たち春の旗 急いでね
アイリス、黄水仙、みんな準備ができてるね
スイセンはわかっている、私がどんなにご機嫌か
ヒナギクさん、私のお気に入り、とっても美しい

《ああ、僕が星であったなら》 Jean-Paul Richter Flegeljahre, Bd.3, Nr.36

ジャン＝パウル詩 小説『生意気ざかり』第3巻 第36番「帆立貝」より

O, wär' ich ein Stern — ich wollte *ih*r leuchten;
Wär' ich eine Rose — ich wollte *ih*r blühen;
Wär' ich ein Ton — ich dräng'in Ihr Herz;
Wär' ich die Liebe, die glücklichste — ich bliebe darin.
Ja, wär' ich nur der Traum, ich wollt' in *ih*ren Schlummer ziehen und der Stern und
die Rose und die Liebe und alles sein und gern verschwinden, wenn *sie* erwachte.
斜体は小説の原文のまま

ああ、僕が星であったなら — **彼女のために** 輝きたい；
僕がバラであったなら — **彼女のために** 花咲きたい；
僕が音であったなら — 彼女の心に押入るのに；
僕が愛、それも一番幸せな愛だったなら その中に居続けるのに。
いや、僕が夢でさえあったら **彼女の** まどろみに入っていき、星 そして バラ
そして 愛 そしてすべてでありたい そして喜んで消えてしまいたい、**彼女が**
目覚めるその時に

C. M. v. ヴェーバー フルート三重奏曲 第3楽章 〈羊飼いの嘆き Schäfers Klage〉
羊飼いの嘆きの歌 ゲーテ詩

あの山の上
あそこに 何千回と僕は立っている
杖にすがり
そして谷を見下ろすのだ

それから 僕は放牧の群れを追い
番犬がそばで群れを見張る
僕は山を降りてきた
だが覚えていない どんな風にか

あそこは 美しい花で
野原一面いっぱい
僕はそれを折るけれど わからない
誰にあげたらいいのか

そして雨、嵐、雷を
樹の下でやりすごす
あの戸は閉まったまま
だけどすべては、残念だけど、夢だ

虹がかかっている
たぶんあの家の上だ！
しかし彼女は行ってしまった
それも遠い土地へ

あの土地をこえて、さらにもっと
ひょっとして海さえこえて
過ぎてしまった、羊たちよ、過ぎたんだ！
羊飼いは本当につらい